



左義長

火の粉は高く舞い上がり
その火で餅を焼く

文 味岡伸太郎／写真 朝野耕史

左 義長とは小正月の火祭り

である。小正月とは、主に正月十五日に行われる行事のこと。とんと（歳徳）、とんと焼き、とんと、とんと焼き、とんと焼き、とんと焼き、さいと焼き、おんへ焼きなどさまざまな名で呼ばれている。普通十四日の夜もしくは十五日の朝おこなわれるが、大晦日の夕方に焚くのを「とんと」「どんどやき」と呼ぶところもある。民間・町内会が主体となっており、代わられる場合は「どんと焼き」に代表される名称で呼ばれ、寺社が主体となっており、焼納祭と呼ばれる。また「綱引き」「粥占い」

砥鹿神社「火焚祭」。炎が勢いを増し、絵馬などが燃え尽きると、竹の先に細かくされた鏡餅を刺して焼く。

なども行われる。

竹や木の棒を三本組合せ三脚としたものをサギツチョという地域があることから、「さぎちょう」は臨時の火鉤かけの意味であり、古くはこの火祭りでは、屋外で食物を調理して神に供え、人も食べたものと推測される。そのなごりは、今も火祭りの時に餅や団子を焼いて食べ、災難を払う習慣が広く残っていることにかがわれる。この火に当たると若返るとか、ひびが切れないなどいい、あるいは竹が音高くはねるとその年の天気がよくと喜び、灰や火の粉が高く舞い上がるのを喜んだ。

民俗学的には、門松や注連飾りによって出迎えた歳神を、それらを焼くことによって炎と共に見送る意味がある。盆の火祭

りにも火を燃やす習俗があるが、こちらは先祖の霊を迎えたり、送り出す民間習俗が仏教と混合したものと考えられている。

豊

川市一宮町の砥鹿神社では、一月十五日午後二時頃から火焚祭が行われる。昨年

一年間のうちに神前に納められた祈願絵馬や願いの串、安産を願う柄杓守りなどを杉の葉と一緒に燃やして諸願成就を祈う。

炎が勢いを増すと、訪れた多くの参拝者が細かく砕かれた鏡餅を、用意された四メートルほどの竹棒の先に刺し、火に近付けてあぶって食べる。火力が強いため、用心しなければ直ぐに焼き焦げ真つ黒く硬くなってしまう。約一時間ほどで、用意された鏡餅が焼き上がると参拝者は三々五々帰って行く。

この日は本宮山山頂の奥宮

では、農作物の豊凶や天候を占う粥占祭も行われる。

本

誌の取材エリアからは、若干外れるが、一月の第四日曜日午後二時から南知多

師崎で「師崎左義長まつり」が開催される。

師崎漁港内の会場中央には正月飾りやお札などが積み上がり、その横には、和紙で作られた大漁を祈った判じ物が書かれた「幟」が立てられている。

判じ物とは、江戸時代に流行した、文字や画に隠された意味

を当てるなぞ解きのこと。祭りの途中で謎は明かされる。

正月飾りに火がつけられると、瞬く間もなく燃え広がり、煙は空高く上がっていく。やがて「幟」の下に若衆たちが集まり「幟」の張り綱が外され、燃え盛る正月飾りの山の上に倒される。火の粉が大きく散ると同時に幟にも火がつき燃え上がっていく。火のついた幟が起こされ、また倒され、また起こされて、あたり一面は焰と煙でいっぱいになる。

祈願絵馬や願いの串、安産を願う柄杓守り。



砥鹿神社「火焚祭」神職が祈願し、点火される。



左義長

火の粉は高く舞い上がり
その火で餅を焼く

K&LのID

義

せんだら／元は古来インドの被差別民への呼称で、日本では下層身分の一般に対する呼称として使用された。漁夫の家に生まれた日蓮は、旃陀羅^{せんだら}の家の出自だと「佐渡御書」でのべている。

広域 Map／P153.A3



広域 Map／P156.D4



広域 Map／P156.D3



り、炎と共に見送る意味があるとされる。たいして、お盆に火を燃やす習俗は先祖の霊を迎えたり、そののち送り出すという、古くからの習俗が仏教と混合したものという。

ところで、本来、お焚き上げで焼かれるのは、祈禱された神符守札が対象で、祈禱の後、焼かれた。しかし、しめ縄・門松は祈禱されていないことから、田畑や裏山に捨てることもでき、神職・僧侶なしに地元住民だけでどんど焼きをすることができ

伊良湖神社「こせんだらまつり」

上／参道中程の籠堂での火鑽神事

中／祠型に組まれた大割木の中の古いしめ縄や正月飾り

下／舞い上がる炎に豊漁と安全を祈願する



「師崎左義長まつり」判じ物が書かれた「幟」が倒される。

左 義長には分類されていない火祭り「こせんだらまつり」が、大晦日から元日にかけて、田原市伊良湖神社で開催される。

大晦日の深夜、参道中程の籠堂での火鑽神事を終えると火は大松明に移され石段を駆け上がり、拝殿前に祠型に組まれた大割木の中の古いしめ縄や正月飾りに点火される。戦前は、旧境内地の伊良湖岬付近の宮山で催され、燃え盛る御神火の炎は三河湾内の篠島や南知多方面からも眺められ、人々は、浜に出て遙拝したという。

高く舞い上がる炎に三河湾に生きる「海の民」は豊漁と安全を祈願したのでろう。

お札や門松・しめ縄などの正月飾りを持ち寄って燃やすことには、出迎えた歳神を見送

石垣により地盤が嵩上げされている
旧家の周囲。岡崎市明大寺町茶の
木原義路

義考 義名

きぎこうめい

義の意味を考えるに、それは、たいそ
う重たい。それを、あえて地名に使
うとなると、特別な理由がありそうだが、
そうとは限らない。意味も無く、当て字で
あったり、また、正反対の字義を持つ地名
が並んでいたりする。そんな地名の義を求
めて旅に出た。

義路

ぎろ

分類不可分の領域
タブーの地名

文・写真 味岡伸太郎

岡崎市新堀町ギロ、岡崎市新堀町妓楼。



の木原義路(岡崎市久後崎町キロ)。岡崎市新堀町ギロ、岡崎市新堀町妓楼。岡崎市定国町鴨ギロ、岡崎市中村町キロ、岡崎市立田町ギロ、豊橋市牛川町ギロウ。田原市中山町儀呂。愛西市にも葛木町ギロ、立田町ギロや、小牧市義領を含めて愛知県内に三十箇所ほどある。」という。カタカナ表記が目立つが、語幹の違うアイヌ語由来の地名は、漢字が当てにくく、カタカナ表記されることがあるというが、定説ではない。

そんなことを頭に入れ、本誌の取材エリアの「ギロ」を訪ねてみた。

まず、最初は岡崎市明大寺町茶の木原義路である。地名の意味を考えるには、使われる漢字よりも、その音に注目すべきなのだが、数多い「ギロ」地名の中で、唯一今号のキーワードである「義」が使われていることから、取材対象となった地名である。

辺りはすでに宅地化され、一見したところ低地、湿地帯などの面影は無い。岡崎市久後崎町キロとは南北に接し、合わせて約

岡崎市明大寺町茶の木原義路。4段の階段で1mほど上がっている。



「ぎろ」という地名について、柳田國男は「地名の研究」の中で「ギロという地名も近江・美濃・伊勢にかけて多いが、何のこゝやら今にまだ心当りが無い。」と記している。それを前提に推論を試みる。

柳田國男とは別に、幾つかの推論がある。最も多いのが「ギロ」というのは(嫌の意味で、泥深い湿地であるために嫌われた土地という意味する。)というものの。また、分れ道の岐路が訛って「ギロウ」となったという説もある。「粘土」のことを「ギロ」と称する地域もある。

北海道十勝本別町の嫌侶は、アイヌ語由来の「キロル(水汲みのためにおりる坂道)」よりという。

これらのことから推論できるのは、おそらく水に関わりがあり、川に近い低地、湿地帯などを表わし、台風、豪雨などによる水害が起きやすい土地と考えられ、いわゆる災害地名と呼ばれるものの一つであろう。

地盤工学会中部支部「地形地質と関わる災害地名」によれば「岡崎市明大寺町茶

義路

分類不可分の領域
タブーの地名

Key Word

義

田原市中山町儀呂



そこで思い出したのが、文化人類学者・言語学者の西江雅之が語っていた「タブーは分類不可分の領域に発生する」という言葉である。

「タブー」は、もともとは未開社会や古代の社会で観察された、何をしてはならない、何をすべきであるという決まり事で、個人や共同体における行動のありようを規制する広義の文化的規範である。（ウィキペディア）。安全な高台と古い湿地を繋ぐ「将来水害が想定される傾斜地」はまさに、その「分類不可分の領域」の「タブー」の地と言える。

災害地名は、「復旧した後でも、忘れたころにまた災害を受けやすい地名で、東日本大震災や紀伊半島水害の被災地には、災害地名が連続している。（地形地質と関わる災害地名）」という。災害地名は、自然災害への戒め、警告、メッセージで、残さねばならない「先人の教え」なのだ。

岡崎市定国町鴨ギロ、岡崎市中村町キロ、岡崎市中村町中ギロ。



南北四百メートル、東西百メートル。その北を流れる乙川からは約四百メートルである。一周してみると、区画の最南端の旧家から北に若干下り始め、その旧家の周囲は石垣で地盤が嵩上げされていた。

次の、「岡崎市新堀町のギロ、妓楼」も「岡崎市定国町鴨ギロと岡崎市中村町キロ、中ギロ」の二地区はすでに圃場整備（ほくよう）が終わり、辺り一面の田圃が広がり、往年を想像できるものは何もない。しかし水田であることは、低地であることに違いはない。

豊橋市牛川町ギロウは豊川と朝倉川に挟まれた牛川台地からの傾斜地で、多くの敷地は嵩上げされていた。また、田原市中山町儀呂も圃場整備を終え、中程を三面整備された水路が縦断し、水は三河湾に流れ込んでいる。この地区は圃場整備前は水路に向かった傾斜地であったとみなしても、あながち間違いではないだろう。

岡崎市明大寺町茶の木原義路、豊橋市牛川町ギロウ、田原市中山町儀呂から推測すれば、これらの地区は、高台と湿地あるいは水路を繋ぐ傾斜地であったのではないだろうか。